

◆ 基礎情報

計画名	看護学部共立リーダーシップ評価システムの活用
実施責任者	看護学部 田口 理恵
対象者	看護学部 1～4年次生 424名
実施期間	2025年4月～2026年3月

◆ 取組み概要

本プロジェクトは、看護学部の全教育課程を通じた「共立リーダーシップ」育成の体系化を目指し、2024年度GPにおいて構築した評価システムを運用・定着させ、教育改善に活用することを目的とする。

本学では2025年度より教養教育科目におけるリーダーシップ教育の必修化が進められているが、専門教育科目を含む全課程を通じた体系化は依然として課題である。これに対し看護学部では、全ての演習・実習をリーダーシップに関連するディプロマ・ポリシーに紐づけ、講義科目にもグループワークを導入するなど、全課程で育成を行う基盤を整えてきた。本プロジェクトではこの基盤を活かし、学期ごとの成長サイクルを評価するシステムを運用した。

具体的には、全学生を対象に年4回、共立リーダーシップのループリックに基づいた「自己評価」と「成長目標の設定・振り返り」を実施している。また、1～3年生には継続的な取り組みを促し、4年生には卒業後の活躍を期待して「リマインダー・グッズ」を授与する動機付けの仕組みを構築している。本年度は、さらに、蓄積された学生の意識データを多角的に分析し、得られた知見を教育介入や広報戦略に還元することで、エビデンスに基づいた教育マネジメントの推進を目指した。

◆ 取組み全体の流れ

本プロジェクトは、評価システムの運用と、蓄積されたデータの分析という二段階の流れで実施した。

(1) 評価システムの運用

看護学部の全学生を対象とした「リーダーシップ評価サイクル」の定着を図った。具体的には、学内システムのkyonet（マイステップ）を活用し、年4回の入力機会を設けた。学期開始時には「共立リーダーシップ・ループリック」を参照しつつ具体的な目標設定を行い、期末には授業や学外活動でのエピソードを交えた振り返りと自己評価を実施した。このサイクルを継続することで、学生がリーダーシップを一時的な役割ではなく、専門職として恒常的に備えるべき資質として捉える環境を整備した。また、後期末にはロゴ入りの実用品をリマインダー・グッズとして授与し、次年度や卒業後を見据えた動機付けを強化した。

(2) データ分析による教育効果の分析と教育改善の検討

蓄積された成長目標データには、学生の理解度やマインドセットが反映され则认为、分析を実施した。分析は以下の四つの視点で行った。

まず「定量的分析」として、リーダーシップの4指標に関連する語群を定義し、キーワードの出現頻度から学年・年度ごとの意識の向け先を数値化した。次に「定性的分析」として、代表的な記述の文脈を精査し、成熟過程を読み解いた。さらに「経年変化分析」では、2～4年生において、前年度と本年度の目標を比較し、学年進行による教育効果を検証するとともに、「年度間比較分析」により、2024年度と2025年度の入学生データを比較した。

これらの分析結果から、現在展開されているリーダーシップ教育の効果を詳細に分析するとともに、看護学部の全教育課程を通じた「共立リーダーシップ」育成の体系化に向けた示唆を得た。

◆ 取組みの成果

本システムを用いた分析の結果、学生のリーダーシップが年次を追うごとに「自己の殻を破る勇気」から「チーム医療を支える実践的な武器」へと昇華していくプロセスが可視化された。低学年時の個人的な振る舞いへの焦点が、実習経験等を経て、チームの目標共有や適切な援助要請といった高度な調整能力へと深化していく様子が確認でき、本教育課程の有効性がエビデンスとして示された。

また、年度間比較からは広報活動によるマッチング効果も示唆されており、入学前から専門教育までを一貫したストーリーで繋ぐ重要性が再確認された。

今後の示唆として、学年進行に合わせた段階的な課題設定の最適化とともに、膨大なデータを迅速に還元し、教育マネジメントの質をさらに高めるための専用システムの構築が重要な課題として見出された。

◆ リーダーシップ教育に関する実践

共立リーダーシップの意識づけ、目標設定の活動	kyonet（マイステップ）を活用し、全学生が各学期の初めに「共立リーダーシップ・ループリック」を参照して目標設定を行った。学生は、当該学期の演習・実習・講義、さらには学外活動を含め、どのような機会にどのようなリーダーシップを発揮したいかを具体的な「成長目標」として言語化し、システムへ登録し、日常のあらゆる場面において常にリーダーシップを意識し、意図的に行動を選択する土壌を醸成した。さらに、理念の定着を視覚的に促す施策として「共立リーダーシップ」のロゴを配したトートバッグ等を「リマインダー・グッズ」として活用した。
協働活動	看護学部では、全ての演習・実習科目をリーダーシップに関するディプロマ・ポリシーに紐づけ、講義科目においてもグループワークを積極的に導入するなど、全教育課程を通じてリーダーシップを育成している。加えて看護学部では、本年度のリーダーシップGPにおいても、計7件のプロジェクトが採択されており、これらのプロジェクトを通じて、学年進行に合わせた独自の教育プログラムを展開している。
共立リーダーシップの観点での振り返り	kyonet（マイステップ）を活用し、学期開始時に自身で設定した成長目標および「共立リーダーシップ・ループリック」を参照しながら、具体的なエピソードを交えた振り返りと自己評価を実施した。これらの目標設定や自己評価は、クラスアワー等の集合形式で行い、担当教員が本活動の意義を十分に説明した上で取り組ませた。また、年度末には担当教員より一年間の取り組みに対する労いの言葉をかけつつ、リマインダー・グッズを贈呈した。こうした教員による直接的な動機付けを通じて、学生が自身の成長を実感し、次年度の活動に向けた意欲を高める機会とした。

◆ 学生の成長に関する総括

学生が設定したリーダーシップの成長目標を時系列で分析した結果、その意識が「自己の殻を破る勇気」から「チーム医療を支える実践的な武器」へと昇華していくプロセスが確認された。具体的には、1・2年次における「発言への不安を克服し、自立した一員として貢献する自己の確立」を基盤として、3年次以降はリーダーシップの知見が看護実践と融合し、専門職としての責務を果たす「完遂力」へと発展していた。単なる積極性の発揮に留まらず、臨床現場で共通のゴールを提示する「目標共有」や、安全な看護提供に不可欠な「援助要請」の重要性を自覚する段階へと、深化を遂げていた。また、2024年度入学生との比較において、2025年度入学生は入学時点で「助け合い」や「他者の尊重」といった共立リーダーシップの理念を既に内面化している傾向が見られ、広報活動を通じたブランドマッチングが、教育のスタートラインを効果的に底上げしている可能性が示唆された。

◆ 取り組みを通じた全体の所感

本システムを用いた分析の結果、今後の教育活動への示唆として、第一に学年進行に合わせた「段階的な課題設定」の重要性が見出された。具体的には、1・2年次には発言や行動への「率先垂範」を促し、3年次以降はチームの安全と成果を担保するための「目標共有」や「援助要請」へと、教育の力点を意図的にシフトさせるなど、年次に応じたアプローチ方法の調整が有効であると考えられる。第二に、入学生のマインドセットは社会情勢や「共立リーダーシップ」の認知度とともに変化し続ける。そのため、学生が設定する目標の質や到達度を継続的に可視化し、その動向を柔軟に教育プログラムへ反映していく重要性が示された。これまで本学部では、主に自己評価を用いた量的データの分析により教育効果を検証してきた。しかし、本システムの運用によって、経年的な質的データの蓄積と多角的な分析が可能となり、教育改善に向けた意義深い知見が得られることを確信した。

◆ 今後の展開

本プロジェクトにより、データの蓄積が教育改善に資することが証明された一方で、現行の収集・分析手法は多大な工数を要し、迅速なフィードバックに課題があることも浮き彫りとなった。今後は、学生が入力しやすく、教員側がリアルタイムで変容を可視化できる専用システムの構築が喫緊の課題となっていく。これにより、エビデンスに基づく教育マネジメントを、より安定的かつ効果的に運用していくことが求められる。